



# 千住大橋の 不流伝説

## はじめに

東京の隅田川は、さまざまな形と色の橋が架けられていることから、「橋の博物館」と呼ばれています。なかでも川辺に遊歩道が整備され、遊覧船のコースにもなっている吾妻橋から下流の橋がよく知られており、国の文化財に指定された勝鬃橋や永代橋、清州橋の三橋梁は特に有名です。

多種多様な隅田川の橋梁の中で、最初に架けられた橋は、吾妻橋から5kmほど上流に遡った千住大橋でした。そして、この橋には創架から明治18年(1885)の洪水で流されるまで約300年もの間、一度も流失しなかったという「不流伝説」が伝えられています。

## 不流伝説

これは、しばしば事実として、書籍などに紹介されています。しかし、架以来そのまま残り、土中に埋まっている部分は化石となっているなど、杭木が丈夫だとするものです。実際、千住大橋は丈夫だったようで、文禄3年(1594)の創架以来、初めて架替が行なわれたのが、記録上では50年以上も後の正保4年(1647)であり、通常の木橋の寿命が約20年とされることを考えれば、倍以上長持ちしたことになります。

また、享保8年(1723)の小塚原・橋戸両町の名主の書き上げには、天和4年(1684)の架替から40年も長持ちして今に至ると書かれており、その理由として橋杭を檜から楨に変えたこと、また隅田川下流の汽水域とは異なり、千住大橋は河口から10km以上も上流の淡水域なので、水虫や船虫による虫害が無かったことが挙げられています。

## 両国橋などの立地

隅田川に二番目に架けられた両国橋は、松村博氏の『論考 江戸の橋』によれば創架以来、幕末までの約200年間で洪水によって10回も流失しており、千住大橋の3回に比べ格段に多く流されています。両国橋は河口から近い汽水域にあり、しかも鉄砲水が発生する神田川の合流部よりも下流でした。三番目の新大橋、四番目の永代橋も両国橋より下流に架けられたため、虫害と洪水の影響

日本大学教授の伊東孝氏や、『論考 江戸の橋』を著した松村博氏らによって、記録に残るだけでも享保13年(1728)、明和3年(1766)、明和9年(1772)と、明治18年までに計3回流されていることがわかっています。なぜ「不流伝説」は事実として流布しているのでしょうか。まずは、簡単に千住大橋の歴史を振り返ってみたいと思います。

## 千住大橋の歴史

千住大橋は、徳川家康が江戸入りした天正18年(1590)の4年後、文禄3年(1594)に奥州道中整備の一環として架けられました。家康の江戸への転封は、天下人であった豊臣秀吉の命令によるもので、関東以北の抑えを期待されていました。そのため、家康は北方への幹線道路の整備を急ぎ、隅田川の奥州道中筋に千住大橋を架けました。これは多

を強く受けたようであり、寛保2年(1742)の洪水では、千住大橋は無事だったにもかかわらず、両国橋より下流の橋は被害を受けたと記されています。

## 千住大橋の構造

この洪水のあと、両国橋の架替のために千住大橋の構造が調べられました。それによると幅員は4間(7.3m)で、橋長は66間(120m)、橋脚杭列は16箇所ですべて3本建てでした。また、杭には端部で末口1尺9寸、2尺余(58〜61cm)、中央部では2尺3寸、2尺7寸(70〜82cm)という太いものが使われていました。

なかでも松村博氏は、橋面の反りが4尺2寸(1.2m)と両国橋の約半分であったことに注目し、これは隅田川の上流部であったため大型船の航行を考慮する必要がなく、勾配を低くとることができたので、構造的に安定していたと考えています。

## 伝説の形成

これまで見てきたように千住大橋は、他の橋と比べて立地条件にめぐまれ、しかも頑丈だったと考えられ、流失回数も少なかったことがわかりました。しかし、繰り返すことになりませんが、300年間流失しなかったわけではありません。

摩川に架けられた東海道筋の六郷橋より6年も先んじていますので、家康がいかに関東・東北の経営を重視していたのかわかります。それ以来、両国橋が架けられるまで、隅田川には60年以上も千住大橋しか橋がありませんでした。

家康が亡くなると、奥州道中は日光東照宮への参拜路としても重要となり、千住大橋の両岸も千住宿として賑わいました。元禄2年(1689)には、松尾芭蕉がこの地から「奥の細道」へ旅立ったことでも知られ、さらに慶應4年(1868)には、最後の将軍・徳川慶喜が水戸への蟄居を言い渡され、この橋を渡って江戸を去っていきました。その後、昭和2年に現在の鉄橋が架けられ、ブレースド・リブ・タイプ・アーチの橋としては日本で現存最古となっています。

## 113年間の不流

ここで注目したいのが、明和9年(1772)から明治18年(1885)までの113年間です。記録に残っている限り、100年以上という非常に長きにわたり、流失はみられません。一方、両国橋では安永9年(1780)、天明6年(1786)、弘化4年(1847)の3回にわたり、破損や流出が見られます。

この時代に生きた人々の記憶には、よく流れる両国橋などと比べ、千住大橋はまさに不流の橋として残り、親から子、孫へと語り継がれていったのではないかと考えられます。

昭和30年の『新修荒川区史 上巻』には、橋の桁間で育った亀が成長しすぎて出られなくなり、どんな洪水でも流失しないのは、その大亀が一生懸命に水をかいているからだという話を採録しています。おそらく明治から昭和にかけてこのように不流伝説が語られていたのでしょう。

## おわりに

そして、これが「300年流失しなかった」と誇張されたのは、千住大橋が家康江戸入りと共に生まれ、徳川慶喜を見送ったという、いわば徳川幕府と約300年の運命を共にしたからではないかと考えられます。徳川慶喜が、千住大橋を渡って江戸を去ったことには触れましたが、



昭和2年竣工当時の千住大橋  
出典:『本邦道路橋欄 第二版(昭和三年版)』

## 丈夫な千住大橋

このように歴史ある橋のためか、千住大橋には多くの伝説が伝わっています。たとえば、橋杭は伊達政宗が献上した楨の大木であったため、朽ちもせず、虫に喰われもせず

これは劇作家の真山青果によって『將軍江戸を去る』という戯曲の大詰めに取り入れられ、昭和9年から現在にいたるまで公演されています。劇中で慶喜は、「天正18年8月朔日、徳川家康江戸城に入り、慶應4年4月11日、徳川慶喜江戸の地を退く。歴史の記述は短かろうが：その間270有8年の年月を通じて、われ等の目にうつる江戸は：長い過去、忘れ難き歴史の事実をもっているのだ。」と見送りの人々に語りかけながら千住大橋を渡って去っていきます。

この場面に涙した人々の脳裏には、いつしか徳川幕府と千住大橋の不流伝説が結びつき、300年間流れなかった橋として語りつがれるようになったのではないのでしょうか。

(文：江口知秀)



現在の千住大橋